

＜日本イギリス哲学会 第114回部会関東例会 報告要旨＞

第一報告：「ジョン・ロックにおける理性主義と快楽主義」

鈴木 奨

ジョン・ロックは、初期の『自然法論』(c.1663-64)などで理性によって見出される自然法について論じ、主に『人間知性論』(1690; 2nd, 1694; 4th, 1700)においても理性・知性の働きについて積極的に論じている。そのため、ロックは、道徳に関して理性を重視する立場であり、理性主義的な道徳論を提示していると考えられている。しかしその一方で、彼は、主に『人間知性論』で論じられている快苦や欲求を基軸とした快楽主義的人間観を提示しており、道徳に関する賞罰に基づく行為の動機づけについて論じている。そのため、ロックは、理性の役割を重視する一方で、快楽主義的な道徳論を提示しているとも捉えられている。

このような理性主義的な記述と快楽主義的な記述は、ロックが道徳についてどのように考えていたのかということへの理解を困難にさせ、ロック研究者たちの間で論争を呼んでいる。たとえば、フォン・ライデン、ラスレット、アーロン、シュナイウィンドらは、それらの記述を統合的に解釈することが困難であるという立場に立っている。その一方で、コールマン、ダーウォル、シェリダン、ロシターらは、それらの記述を統合的に解釈することができるという立場に立っている。

本報告では、これらの先行研究を踏まえつつ、ロックの理性主義的な記述と快楽主義的な記述がどのように論じられているのかを整理し、それらが互いにどのような関係を持っているのかについて論じていく。そのうえで、それらの記述を統合的に解釈することが可能なのかどうかということについて探っていく。仮に統合的な解釈が可能だとすれば、どのような要素が統合的な解釈のための条件になっているのかについて検討していき、それを踏まえつつ両者の関係について明らかにしていきたい。

上述したことを示すために本報告では、以下のように議論を進めていきたい。第一に、『自然法論』や『人間知性論』において中心的に論じられている理性や自然法に関する理性主義的な記述が、ロックの文脈において、どのようなものであるのかについて確認する。第二に、主に『人間知性論』において論じられている快苦や欲求に関する快楽主義的な記述が、同じくロックの文脈において、どのようなものであるのかについて確認する。最後に、これらの議論を考慮したうえで、ロックの理性主義的な記述と快楽主義的な記述が、いかにして統合的に解釈可能なのかについて検討していき、統合的に解釈していくうえで重要となる条件や両者の関係について考察していく。

(慶應義塾大学大学院 文学研究科・博士課程)

第二報告：「バーナード・ウィリアムズにおける「倫理」と「政治」：道徳哲学批判と政治的リアリズムの地平」

濱野 倫太郎

バーナード・ウィリアムズ（1929-2003）は、哲学者・倫理学者として生前より多岐にわたる議論で注目を集めてきた。とりわけ *Ethics and the Limits of Philosophy* (ELP) での議論に代表される、近代道徳哲学に対する批判は広く知られている。また、現代の政治哲学・政治理論が道徳哲学の応用にとどまっていることを批判し、政治それ自体を捉える政治理論の必要性を説く「政治的リアリズム」という潮流の主要な論者としても知られている。

哲学・倫理学分野におけるウィリアムズ研究は、邦訳（ウィリアムズ 2024）や入門書（渡辺 2024）の新たな出版に見られるように、英語圏のみならず日本でも近年盛んとなってきている。他方、政治学（政治理論）におけるウィリアムズ研究は、とりわけ日本において、乙部延剛や松元雅和、山岡龍一らによる先駆的研究が存在する一方、未だ部分的なものにとどまっている。

政治的リアリズムに関する多くの先行研究では、政治的リアリズムの文脈においてウィリアムズおよび他の論者が「政治」と「道徳 (morality)」とを対比的に扱っていることが強調されている。そこでは、ウィリアムズが道徳哲学批判の文脈でこだわった「道徳」と「倫理 (ethics)」の違いや「倫理」概念そのものへの注意は、十分に向けられていない。その結果、ウィリアムズの政治的リアリズム論における「道徳」批判は、「政治」から「道徳」のみならず「倫理」をも排除する議論として理解される傾向にある。

そこで、本報告では、（政治理論分野の）先行研究において検討が不十分であるウィリアムズにおける「道徳」と「倫理」の違いを確認したうえで、ウィリアムズにおける「倫理」と「政治」が有する密接な関係の存在を明らかにする。そのうえで、こうした検討がウィリアムズ理解および政治的リアリズムの新たな地平を開きうることも示唆する。

具体的には以下の構成を予定している。第一に、政治的リアリズム論一般およびそこでウィリアムズ理解を整理する。第二に、ウィリアムズの道徳哲学批判を概略する。第三に、ELP でのウィリアムズ自身による議論やウィリアムズとならぶ政治的リアリズムの主要な論者として知られるレイモンド・ゴイスによるウィリアムズ理解などを補助線としつつ、ウィリアムズにおける「倫理」と「政治」の絡み合った関係の存在を明らかにする。

【上記で言及した文献】

- ・バーナード・ウィリアムズ（2024）（河田健太郎・渡辺一樹・杉本英太 訳）『恥と運命の倫理学：道徳を乗り越えるためのギリシア古典講義』慶應義塾大学出版会。
- ・渡辺一樹（2024）『バーナード・ウィリアムズの哲学：反道徳の倫理学』青土社。

（慶應義塾大学大学院 法学研究科・博士課程）